

2. 漁場環境調査研究費

1) 平成9年度琵琶湖定期観測結果

鈴木隆夫・森田 尚・二宮浩司・吉岡 剛・前河孝志

【目的】琵琶湖は、滋賀県の水産業を支える重要な漁場であり、その環境動向を把握する事は漁場環境保全のための基礎資料を得るうえで大切である。本調査では琵琶湖北湖の環境を理化学的および、プランクトンなどの生物学的側面から定期的に調査し、昭和初期からの長期的な蓄積データとの比較をもとに、琵琶湖の現状を把握することを目的とする。

【方法】彦根港と安曇川河口を結ぶ線上の5定点（図1）において、毎月1回中旬頃に調査を行った。調査項目は、気象・水象、透明度、水温、pH、DO、COD、 $\text{NH}_4\text{-N}$ 、 $\text{NO}_2\text{-N}$ 、 $\text{NO}_3\text{-N}$ 、Org-N、 $\text{PO}_4\text{-P}$ 、T-P、 SiO_2 、Cl、クロロフィル、プランクトン沈殿量および種組成である。

【結果】各分析方法および項目の具体的数値については、資料として添付した。なお、以下の文章中に現れる平年値は、溶存酸素量については昭和62年～平成8年度までの10年間平均値、透明度、プランクトン沈殿量、湖水温は昭和34～63年度までの30年間平均値である。

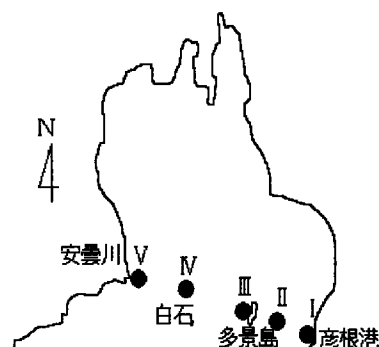


図1 調査地点

1. 琵琶湖水位変動（図2）

平成9年度の前半は、6月に大雨の影響により一時的に水位が増加した以外は、概ね計画水位に沿った水位が保たれていた。しかし、後半は10月から平成10年1月頃まで大きく計画水位を下回り、11月14日には最低水位の-69cmを記録した。

2. 透明度年変化（図3）

平成9年度の透明度は、5月以外はすべて平年値を上回っていた。

2. Stn. 4における75m層溶存酸素量年変化（図4）

8,9月以外は平年値を下回ったものの、大きな低下は観測されなかった。

3. 平年値に対するプランクトン沈殿量割合年変化（図5）

各層ともほとんどの月で平年値を下回っていた。

4. 湖水温年変化（図6 0.5m層，図7 30m層）

0.5m層では4,5月と12月～3月の冬季に平年値との差が見られ、水温が高かった。30m層では、10,11月以外は年間を通じて平年値より高かった。

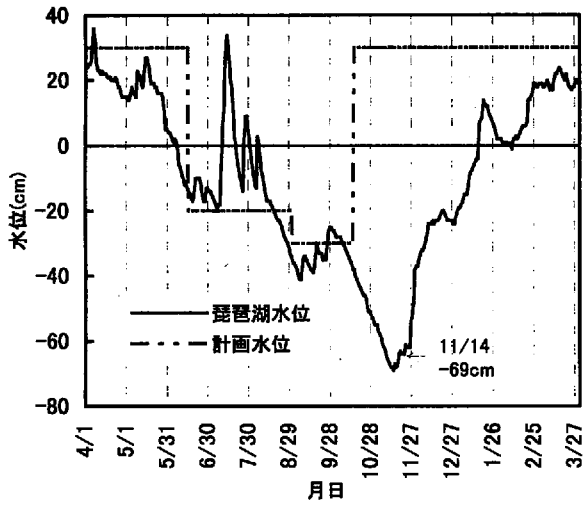


図2 琵琶湖水位年変動

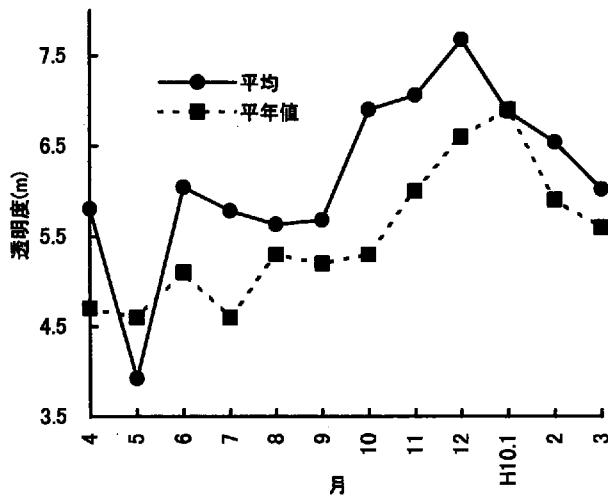


図3 透明度年変化

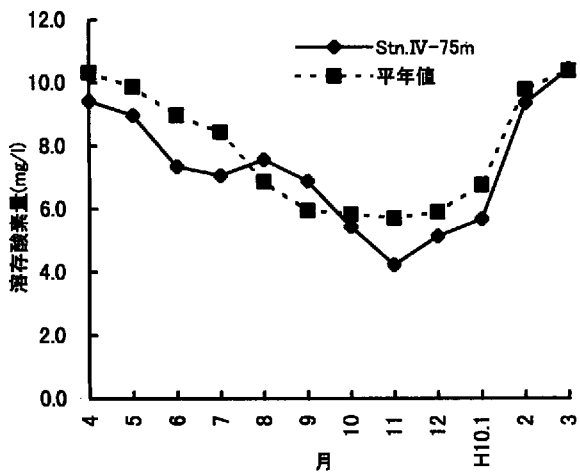


図4 Stn. IV-75m層における溶存酸素量年変化

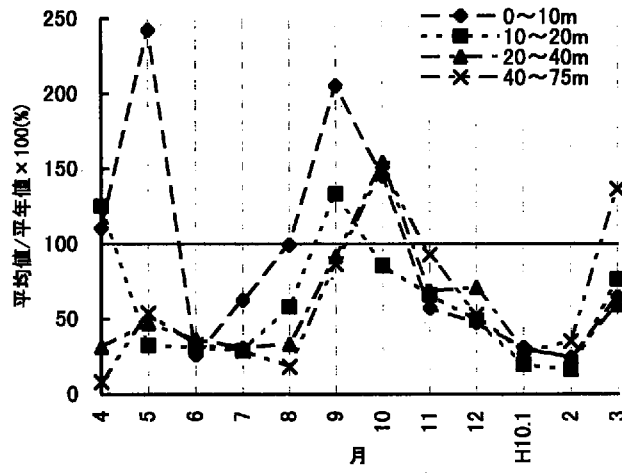


図5 平年値に対するプランクトン沈殿量割合年変化

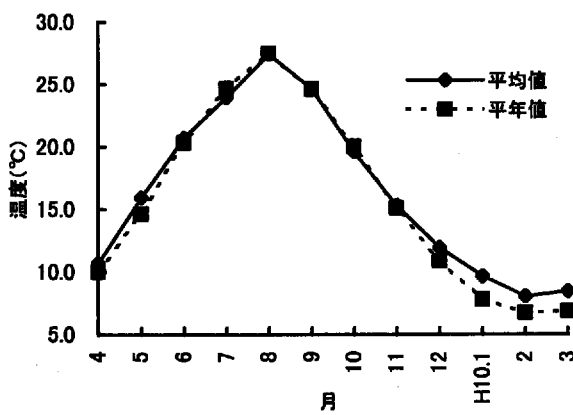


図6 0.5m層湖水温度年変化

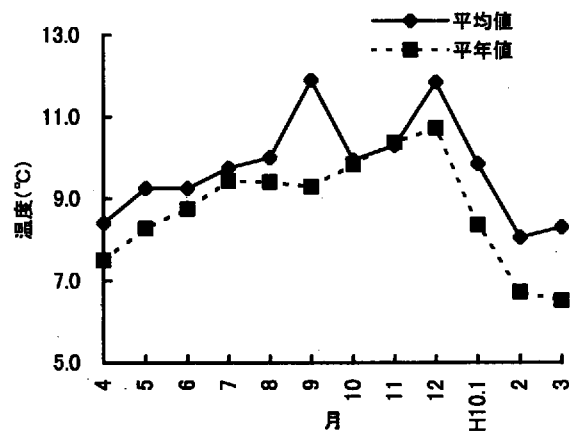


図7 30m層湖水温度年変化